

ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラーと 「批判的」ナショナリズム分析(2)

今 野 元

2. ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラーのナショナリズム研究

ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラーのナショナリズム研究は、従来『帝国の危機の根源』¹⁾、『ドイツ帝国』²⁾、『ドイツ社会史』(全5巻)³⁾などの論文集あるいは概説書でもごく断片的に披露されてきたが、結局2001年初版の理論的概説書『ナショナリズム』(今回参照したのは2007年の第3版)⁴⁾で初めて体系的に展開された。この著作は、ヴェーラーのナショナリズム研究の理論的総決算なので、本論ではその内容を紹介し、考察を加えてみたい(以下数字は同書の該当頁)。

まずヴェーラーは、旧世代のナショナリズム研究者がネイションを実体視していたと批判する。ヴェーラーの学説史理解によれば、ナショナリズム研究は、数多くの国民国家が誕生した第一次世界戦争後に本格的に始まったが、旧来のナショナリズム研究(第1世代はフリードリヒ・マイネッケ(1862-1954年)、カールトン・ヘイズ(1882-1964年)、ハンス・コーン(1891-1971年)、第2世代はハンス・ロートフェルス(1891-1976年)、テオドル・シーダー(1908-1984年)、ヴェルナー・コンツェ(1910-1986年))は、ネイションを「擬似自然的統一体」(quasi-natürliche Einheit)として扱っていたのだという。旧来のナショナリズム研究では、ちょうど「眠れる森の美女」(Dornröschen)が(王子様の)キスで目覚めたように、ゲルマン民族の大移動以降、遅くとも中世以降存在していたものが、あるとき国民意識に「覚醒」して、国民国家形成へと進んでいくものとされていたという(これをヴェーラーは「本質主義」(Essentialismus)と呼ぶ)。またその際「ナショナリズム」(Nationalismus)という概念は、過剰な部類のものを批判する文脈でのみ用いられ、好意的に論じるときは「国民意識」(Nationalbewußtsein)、「愛国主義」(Patriotismus)、「国民感情」(Nationalgefühl)などの概念が用いられていた。ネイションが先行し、そこからナショナリ

ズムが生まれるという図式は、「下部構造」から「上部構造」が生じるというマルクスの議論に類似しているという(7-8)。別な箇所では、同じことをこうも表現する。「旧来のネイション理解は——そしてこのイメージは現在の国民国家の成員の共同での歴史的記憶に深く結び付いているのだが——このネイションが太古の昔 (archaische Urzeit) 以来存在していたと主張する。あるいは一度覆い隠され、外国の影響を受け、眠り込んでいたとしても、改めて覚醒し、呼び起こされ、それに伴い再び自分を意識するようになったのだという。従ってそれは無歴史的な社会人類学的集団として通用しているのである。」(36)

ヴェーラーは1983年を「奇跡の年」(annus mirabilis) と呼び、この年に同時刊行されたアーネスト・ゲルナー (1925-1995年)、ベネディクト・アンダーソン (1936年-)、エリック・ホブズボーム (1917年-) ら (アングロ＝サクソン圏の左派言論人) の著作がナショナリズム研究を刷新したと激賞する。ヴェーラーの言うように、新しいナショナリズム研究では、「構築主義」(Konstruktivismus) が支配的となり、「言語論的転換」が決定的な役割を果たしたため、ネイションは「構想された秩序」(gedachte Ordnung) (エメリヒ・フランツィス (1906-1994年)) と考えられるようになった。こうした構築主義的ナショナリズム研究の背景には、「客観性」論文や「世界像」(Weltbild) 概念でネイションの虚構性を見通していた新カント派の先駆者ヴェーバーがいることを、ヴェーラーは力説する。ヴェーラーは、旧来のナショナリズム研究にも、ナショナリズムの「社会的基盤」(soziale Basis) を分析する際などには「優越」性があるが、「構築主義」にはナショナリズムの認識論的脱構築という明らかな利点があるとして、自分が後者に加担していることを鮮明にしている。ヴェーラーによれば、新しいナショナリズム研究は過去を扱うのみならず、現在においてナショナリズムという「世界像」(ヴェーバー)、「理念的ヴィジョン」(ピエール・ブルデュー (1930-2002年)) が有する正統化機能にもメスを入れているという(8-11)。

ヴェーラーはナショナリズムの理論的貧困さを強調し、ナショナリズムにはマキアヴェッリ、ホブズ、ヘーゲル、マルクス、ヴェーバーのような理論家が一人として登場していないと述べている⁵⁾。ただヴェーラーは、ヴェーバーが情熱的ナショナリストでありながら、自己を律してネイションやナショナリズムの自明性を疑い、現代ナショナリズム研究に道を開い

たことには讃辞を惜しまない(11-12)。

ヴェーラーは、自分の研究ではナショナリズムという概念を——「専門家の国際的議論では長いこと普通になっているように」——「可能な限り中立的に」用いるとし、次のように定義する。「(ネイションと呼ばれる)比較的大規模な連帯的団体の創造、動員、統合に、とりわけ近代の政治的支配の正統化に奉仕する価値体系、原則、世界像」。従って可能な限り均質なネイションを伴う国民国家がナショナリズムの主要な問題になるのだという。またネイションは、「エトニー的支配団体の伝統を再び取り上げることで育成され、ナショナリズムやその支持者たちによって徐々に主権的行為主体へと創り上げられる、第一義的には「構想された秩序」と規定され、ネイションがナショナリズムを生んだのではなく、その逆であることが強調されている(12-13)。

ヴェーラーは、ナショナリズムがアメリカ植民地を含むヨーロッパ世界でのみ自生した「固有の現象」(Unikat)であることを断固強調した上で、それは何故かという問いを立てている⁶⁾。ナショナリズムはコロンブス以前のアメリカでも、中国でも、日本でも、インドでも、東南アジアでも、オーストラリアを含む太平洋諸島でも、アフリカでも、中近東でも生まれなかったと、ヴェーラーが感嘆符「！」付きで断固強調しているのには、目を見張るものがある。更にヴェーラーは第2の問いとして、何故ナショナリズムが全く異なる社会文化的・政治的条件下の非西洋地域で魅力的輸入品たり得たのかを問うている(15)。

ヴェーラーはナショナリズムの成立を、初期近代の西欧社会の構造的危機(「革命」、「近代化過程」)、とりわけ革命や外国支配への応答であると「社会科学」的に解釈している。ヴェーラーの脳裡には、「チャレンジ」に対する「レスポンス」、「挑戦」に対する「応答」という(アメリカ社会科学の?)思考様式がある。ヴェーラーは家族、派閥、部族、領邦など旧来の支配関係が正統性の危機を迎え、主権を有する国民の意思が新しい正統性を付与するというときに、ナショナリズムの出番が回ってくると見ている。ヴェーラーは、近代以前の様々な紐帯がナショナリズムの構成要素として部分的に活用されていることは認めつつも、ナショナリズム自体は本質的に近代の現象であるという立場を強く打ち出す。ヴェーラーは初期の例としてオランダを挙げ、カトリック教国スペインの暴虐へのプロテスタント系で経済的に発達したオランダ人の抵抗、中央への周縁の反逆であった独

立戦争が、のちのナショナリズムに繋がったことを指摘する。またヴェーラーはイギリス、アメリカの「古典的」革命が、当時小国でのみ可能とされていた共和制が大国でも実現可能なことを実証し、その伝統的君主権力からの武力による解放、反カトリシズム、ピューリタンの世界変革意志などの理念がイギリス・ナショナリズムを助長したという。これによりヴェーラーは、正統的権力の打倒がネイションを強化するというヴェーバーの「冷静な」診断に同意している。イギリスに続いてアメリカでは、イギリスの古い自由権によって正当化され、ピューリタンの使命感に駆られた「人民主権」の国家が誕生した。フランスの場合も、旧体制の統治不能から「第三身分」を「ネイション」とする中央集権志向のナショナリズムが生まれたと見ている。このように西欧の「先駆的諸国」(Pionierländer)の歴史を回顧したヴェーラーは、それらの地でナショナリズムが工業化の前に登場していたことを指摘し、工業化の進展により統一した国民文化の必要性が高まってナショナリズムが生まれるというゲルナーの「極端に機能主義的な」解釈を実態に合わないとする。最後にヴェーラーは、ナショナリズム運動が目標とする均質なネイションの形成と、ナショナリズム登場以前から続いてきた国家の形成(統治機構の充実)とが別物であることを強調し、アングロ＝サクソン圏ではこれが混同されて誤解を招いているとしている。ヴェーラーによれば、国家形成がネイション形成に先行した「西欧世界」では「ナショナリズムの成功」が看取できるが、国家の伝統が欠如した国々ではナショナリズムが災い多き不安定さに陥ったと見ている(16-26)。

ヴェーラーは、ナショナリズムがどのような理念的基礎に立脚しているのか、どのように理念が選択されているのか、どのようなイメージがナショナリズムを魅力的にしているのかという点に興味を抱いている。ヴェーラーによれば、西欧の「先駆的諸国」ではどこでもキリスト教＝ユダヤ教的伝統の援用が顕著で、とりわけ選民思想や聖地思想が宿敵憎悪や救世主信仰の高揚へと繋がり、またパウロの兄弟愛論が平等な国民共同体思想にも繋がっているという。これに対し第二次世界戦争後に独立した非西欧諸国では、エトニーの枠組と新国境とが整合しないため、ジンバブウェやガーナのように神話的な文化や大昔の大帝国が近代「国民国家」の基礎にされたのだという(27-32)。

ヴェーラーはナショナリズムが「政治的宗教」(politische Religion)、あ

るいは「市民宗教」(Zivilreligion)、「世俗宗教」(Säkularreligion)になったという。ここでいう「宗教」とは、以下の(相互に関連する)要素を有するものとして、「厳格に形式的に」定義される。(1)偶然性を克服した現世の人間存在の包括的解釈、(2)殉教要求にまで行きつく世界の不可謬な解釈における意味の付与、(3)独占的解釈権への非妥協的固執、(4)あらゆる状況に対してどう対処すべきか規範を与える世界像の提示、(5)中核的教条はあるがあらゆる状況に対応できる柔軟さ、(6)「仲間」(in-group)の間での連帯共同体の形成と「余所者」(out-group)の排除、(7)儀式による信仰の強化、(8)ユートピアの提示による現世の困難の埋め合わせ、(9)共通の信仰による世代間亀裂の克服、(10)ネイションのための殉死などによる超越的なものへの関連付け。ちなみにここで「宗教」概念を持ち出したヴェーラーは、ナショナリズムを「イデオロギー」として理解することには消極的である(32-34)。

ヴェーラーは、ナショナリズムがしばしば世界史的偉業を成し遂げたとされる過去の黄金時代を回顧し、特殊な自由観念と結び付いていることを指摘する。古イスラエルのイメージ、人文主義、新人文主義に発掘されたアテナイやローマのイメージはその好例であるとされる。「生まれつき自由なイギリス人」や、ドイツ語圏のルター派由来の観念もその例とされている。ナショナリズムにおいては自由が闘いにより獲得された貴重なものであるとされ、例としてヘルマン(ケルスキー族長アルミニウス)の逸話が挙げられている(34-35)。

ヴェーラーは、ナショナリズムがネイションを「半神」として絶対視、神聖視し、競合する他の忠誠対象を許容しないものであると認識し、それが「近代」の産物であることを強調する。ヴェーラーは、多くの中世史学者や初期近代史学者が中世や初期近代にネイションの起源を見出そうとするのは常に初めから失敗を運命付けられているとまで断言する。中世や初期近代のネイション概念は学生、商人、手工業者、あるいは貴族の同郷者団体を指していただけで、主権的行為主体ではなかったというのである。「文化史」派が指摘するように、ネイションは階級やジェンダーと同じく近代史の柔軟な構築物であり、ナショナリズムが作り出したものであるという。そしてこの解釈を広めるのに一役買ったのが、(ここでホブズボームの名前を挙げてはいないが)「伝統の創造」という流行の思考様式であるとする。けれどもヴェーラーは、ネイションは全体的構造においては「発

明」されたものだとしつつも、個々の「原材料」は大部分伝来のものだったともいう。ここでヴェーラーは、(アンソニー・スミスの名前を挙げずに)「エトニー」論を援用する。ヴェーラーの理解では、「エトニー」とは「安定した連帯意識を有する自立した支配団体で、共通の象徴的な出自の神話を有し、共通の歴史的経験の意識をますます高め、一つの領土に密接に結び付いたもの」だという。つまりエトニーとは人種というわけではないが、社会文化的—歴史的集団であるとされるのである。エトニーとナショナリズムとの関係については、4つの点が指摘されている。(1)すでに君主支配下で領土内均一化がなされた国家を有するエトニーの内部にナショナリズムが作用する場合には、ナショナリズムはネイションや国民国家に長期間持続可能な基盤を提供する。(2)19世紀のドイツ、イタリア諸国家のようにエトニー的に豊かな伝統を誇る諸連帯団体(諸領邦)がある場合には、ナショナリズムはそれら諸国家の記憶を一つの輝かしい過去のものとして動員することができる。(3)植民地支配を受けた、エトニー的に多様な地域では、その「国民国家」の基盤は著しく不安定なままであり続ける。(4)エトニーとネイションとは密接に結び付いているが、ネイションはエトニーと違って神話化され、他の集団アイデンティティに対して別格視され、主権のネイションの意志により正統化された支配体系の中で生き、特有の共通な大衆文化を持ち、内部で自由通行が認められ内部だけの倫理を持つ独自の経済体系を持ち、他の価値に対して絶対的優位を認められているなどの特徴を有しているという(36-40)。

ヴェーラーは、教養・財産市民の役割は看過できないとしつつも、ナショナリズムには固定した担い手はないとし、これを市民層の運動と決め付けることを問題視している(マルクス主義史学に対する苦言か?)。ミロスラフ・フロフの三段階論に基づき、ヴェーラーは文芸・芸術・歴史の領域の知識人が「国民文化」に注目し、運動が市民層、貴族層のエリート一般に拡大し、そして大衆へと波及していく様を描いている。またヴェーラーは、ドイツやイタリアの場合、ポーランドやアイルランドのような場合、アメリカの場合、旧植民地の場合と、国民国家の成り立ちの違いによりナショナリズムの担い手に違いがあることも言及している(41-44)。

ヴェーラーは「プラハ出身のアメリカの政治学者」カール・ドイッチュの研究に依拠して、コミュニケーションの発達によりナショナリズムが拡大していく様を描いてみせる。その際ヴェーラーは、マスメディアや教育

制度の果たした役割を強調し、構築されていった統一民衆語がグーテンベルクの活版印刷のような手段で広まり、各地域で根強い方言をゆっくり凌駕していったことを重視し、記念碑、行列、祝祭、歌謡、芸術、就学義務、兵役義務などがネーション意識を活性化したことを指摘している。最後にヴェーラーは、ナショナリズムがデモクラシーへ繋がる傾向を持ちつつも、統治実務においては様々な統治形態、社会構造と柔軟に連合してきたことに注目している(45-50)。

ナショナリズムの類型論に関して、ヴェーラーは事実上その恩師テオドル・シーダーの方針を引き継いでいる。ヴェーラーは「古く敬意を表された」マイネッケの「文化国民」「国家国民」論を「非常に限定的にのみ有効」とし、『ナショナリズムの理念』におけるハンス・コーンの二元論を理念的によく立証されているが、両大戦の対決図式が反映されていると論評(批判?)し、ライア・グリーンフェルドの「自称比較概説」も英米を礼讃しドイツを野蛮視する決まり文句の寄せ集めであると切り捨てている。英米仏の「統合的」(integrierend) ナショナリズム、独伊の「統一的」(unifizierend) ナショナリズム、中東欧の「分離的」(sezessionistisch) ナショナリズムというシーダーの三類型論⁷⁾、を引き継ぎつつ、ヴェーラーはこれに欧米モデルを非欧米のエトニーに引き写す「移転型ナショナリズム」(Transfernationalismus) という新しい類型を一つ追加し、比較的安定したネーション以前のエトニーがあった日本にその成功例を見ている。ただヴェーラーは、個々の事例においては複数の類型の混合体を為している場合があることなども指摘している(51-54)。

ヴェーラーは、「初めから自己をネーションとしても理解する共和国」であるアメリカ合衆国が、抑圧に満ちた旧世界に対する新世界としての処女性意識、ピューリタンの選民思想に支えられて、あるいは自然法や啓蒙、「コモン・ロー」への信念に裏打ちされて、他者に対する露骨な優越感を示し、自己の膨張欲を正当化してきたことを鋭く指摘する。その際ヴェーラーは、アメリカ人自身が18世紀以来自国に「帝国」概念を適用し、膨張という「明白なる天命」(Manifest Destiny) に燃えてきたことにも注目する。ヴェーラーは(トーマス・)ウッドロウ・ウィルソン(1856-1924年)、フランクリン・ローズベルト(1882-1945年)、ジョン・F・ケネディ(1917-1963年)、ジョージ・ブッシュ(父(1924年-)か子(1946年-)かは明示されず)が異なる形態ながら、常に基本において同じアメリカ覇権

下の世界秩序を追求してきたことを強調し、それがインディアン、ヴィルヘルム2世、ヒトラー、ホー・チ・ミン、サダム・フセイン、ミロシエヴィチのような「不倶戴天の敵」(Todfeind)に、「サタンの子供たち」、「ファン族」、「ナチス」、「ベトコンのヘドロ野郎」、「愚連隊」と「烙印を押す」(Stigmatisierung)ことに繋がり、却って平和を遠のかせたのだという。またヴェーラーは、アメリカではホロコースト記念碑のようにヒトラー体制下のドイツ人の人道への罪を批判し、もって自国社会の美德を確認するような記念碑(ヴェーラーに言わせれば「死者崇拜」)があるのに、インディアンや黒人奴隷に対する自己批判の契機がないことを指摘している(55-62)。

ドイツ・ナショナリズムの展開に関しては、ヴェーラーは特に力を入れて論じている。以下で詳しく見てみよう。

ヴェーラーは、ドイツ・ナショナリズムに関しても「初めに革命の欠如ありき」という『ドイツ社会史』の決め台詞⁸⁾を繰り返し、フランス革命による軍事力をもつての輸入以前から始まっていた18世紀以来の「近代化の危機」(Modernisierungskrise)が、ドイツ・ナショナリズムを成立させたという見解を示している⁹⁾。ヴェーラーによれば、身分制的支配・社会構造が崩壊するなかで、こうした大変動への応答として西欧を模範とした正統化・統合・動員イデオロギーとしてドイツ・ナショナリズムが生まれたのだという。ヴェーラーはそれ以前にもドイツ・ナショナリズムの「先駆的現象」(Vorläuferphänomen)とも言うべき文化的諸運動があったことは認め、ドイツ知識人がアメリカやフランスの情勢に注視し、改革派の官僚や貴族も「防衛的」近代化を通じた国民国家形成を図っていたことが記されている(62-64)。

アングロ＝サクソン圏の選民思想、使命感を強調するヴェーラーは、ドイツにも同様の発想があったことを指摘する。ヴェーラーがその論者に数え入れるのは、プロテスタント神学者フリードリヒ・シュライエルマッハー(1768-1834年)、出版業者フリードリヒ・ベルテス(1772-1843年)、フリードリヒ・シュレーゲル(1772-1829年)、アダム・ミュラー(1779-1829年)、ハインリヒ・フォン・クライスト(1777-1811年)、フリードリヒ・フォン・シラー(1759-1805年)などである(64-68)。

ヴェーラーは仇敵理念の発達に関しては、フランス支配下で広まったフランス憎悪に注意を向けている。ヴェーラーは、カール・フォム・シュタ

イン男爵(1757-1831年)、カール・フォン・クラウゼヴィッツ(1780-1831年)、フリードリヒ・シュレーゲル、エルンスト・モーリッツ・アルント(1769-1860年)が、感情的な口ぶりで「恥知らずで驕のないフランス人種」を糾弾し、その「虚栄心、傲岸不遜、大言壮語、残忍」に憤り、この「ロマンス系」(welsch)の敵の容赦なき「絶滅」を唱導していた様子を紹介している。とりわけヴェーラーはナポレオンに対する憎悪の激しさを強調するが、「暴君」ナポレオンへの反撥がドイツにおける偉大な人物待望論を呼び起こし、ビスマルクの個人崇拜に繋がっていったという逆説をも示している(68-70)。

ヴェーラーによると、ドイツ・ナショナリズムは1795年から1815年までの間に「座標軸」を張り巡らし、新しい運動として出発したという。当時のドイツ・ナショナリズムはなお下からの活力が弱かったにも拘らず、ドイツ連邦はこれを防圧しようとし、その唱道者たちはギリシャやポーランドの蜂起に「代理戦争」を見出した¹⁰⁾。1848年、ドイツ・ナショナリズムはすでに全ドイツ的、自由主義的、立憲的国民国家を目指す活動家、共感者たちの論拠になっていたが、革命の失敗は大ドイツ主義と小ドイツ主義の対立ゆえではなく、近代化の課題が複雑に交錯したためであったという。1849年以降の反動期に沈静化したドイツ・ナショナリズムは10年弱のちに急速に復活し、ビスマルクはこれと連合することを心得ていたのだという。しかしドイツ国民国家を実現したのは、飽くまでビスマルクの大プロイセン主義的膨張政策であって、大衆の国民運動ではないという。にも拘らずドイツ国民国家は革命的創造物であり、「帝国国民」(Reichsnation)は新しいものだった、「参加と攻撃」(Partizipation und Aggression)(ディーター・ランゲヴィーシェ)が一体化していたというのが、ヴェーラーの見立てである(70-75)。

それでも自由主義運動と密接に結合していたドイツ・ナショナリズムが、「急進的ナショナリズム」(Radikalnationalismus)に「転換」していった契機が1878/79年であったと、ヴェーラーは見ている。転換後のドイツ・ナショナリズムは「帝国ナショナリズム」(Reichsnationalismus)と名付けられ、反ユダヤ主義、「帝国の敵」(Reichsfeinde)の排除、人種主義化など、ヴェーラーの問題視する様々な要素を一身に体現していたものとして描かれている(そこでヴェーバーがどのように位置付けられるかは、ヴェーラーの論じるところとはなっていない)。ちなみにこの「転換」説は、ヴィン

クラークのナショナリズム「機能転換説」と梓組がほとんど同じであるが、ヴェーラーがヴィンクラークの名前を全く出さないのは何とも奇妙である。とはいえヴェーラーは、ヴィンクラークと異なる議論にも踏み込んでいる。「転換」後のドイツ・ナショナリズムを「右のナショナリズム」とするヴィンクラークの見立てとは異なり、ヴェーラーは保守派が(特に人種的)ナショナリズムとは微妙な関係であったことを強調している。社会構造史家ヴェーラーは、ドイツ帝国の急進的ナショナリズムは痛みの多い近代化への応答として解釈できるとしている¹¹⁾(76-83)。

第一次世界戦争は、ドイツ・ナショナリズムを再び急進化させた。戦時ナショナリズムは、ドイツの使命を自覚し、勝利を確信し、「武装を取ったネイション」を統合したが、同時に分裂させもした¹²⁾。敗戦で転落を味わったドイツでは、また新たな急進的ナショナリズムが生まれつつあった。エルンスト及びフリードリヒ・ゲオルク・ユンガー兄弟の言うように、新しいナショナリズムの父は「戦争」であり、いわゆる屈辱がナショナリズムを急進化させた(ちなみにヴェーラーがヴァイマル共和国のドイツ・ナショナリズムに関して、「保守革命」(konservative Revolution)というアルミン・モーラーの概念を用いていない点は見逃せない)。また敗戦で俄にポーランド人、リトアニア人、チェック人らの支配下に入った国外のドイツ人たちの不満も鬱積していった。アドルフ・ヒトラーは、こうした運動全てから力を得ていたという¹³⁾(83-86)。

ヴェーラーのヒトラー時代の叙述は、意外に簡潔である。ヴェーラーによると、ヒトラーが擡頭したのは党綱領の魅力のためではなく、ネイションの名誉回復を求める国民の欲求ゆえであるという。伝統的権力エリートが「一か八か」の賭けでアドルフ・ヒトラーに政権移譲し、再軍備からポーランド及び西欧への侵攻に到る数々の「国民的成功」がヒトラーへの喝采を生んだとするが、ユダヤ人の大量虐殺は厳重秘密にされていたとされ、全てのドイツ人が「排除的反ユダヤ主義」(eliminatorischer Antisemitismus)に取り憑かれ、その実行を待ちわびていたというようなダニエル・ゴールドハーゲンの学説は「支離滅裂なイメージ」でしかないという¹⁴⁾。第二次世界戦争での敗色が濃くなると、前線兵士には生き残り意欲や報復への虞などが重要であったが、1933年以降に教育を受けた(ヴェーラーら)世代では国土を防衛するというナショナリズムが高揚した。同時に少なくとも1千万人に上った「Fremdarbeiter」が、最底辺のドイツ人労働者に優越

感を与えていたという(85-87)。

第二次世界戦争での敗戦はドイツ・ナショナリズムに決定的転換点となり、東西分断期を通じてナショナリズムは国家の正統化の基盤としては機能しなくなった。「ソヴィエト帝国」の「属州」(Satrapie)であった東独では、独自の「社会主義的国民」というアイデンティティが模索されたが、これは失敗に終わった¹⁵⁾。西独では全ドイツ規模の国民意識はますます薄れ、ドイツ・ナショナリズムは魅力を失っていった。ヨーロッパ共同体あるいはヨーロッパ連合への主権委譲がドイツほど容易だった国はなかったと、ヴェーラーは胸を張っている¹⁶⁾(87・88)。

ヴェーラーは1990年の再統一を、ドイツ・ナショナリズムの復活とは見ない。ヴェーラーはそもそも「再統一」(Wiedervereinigung)という言葉を好まず、それを「口語的」(umgangssprachlich)表現に過ぎないと切っ捨て捨てる。ヴィンクラーは東西分断期を「ポストナショナルな特有の道」の時代として異常視し、1990年の再統一で西欧的ドイツ国民国家が実現したことを寿いだが、ヴェーラーはポストナショナルな西独の「政治文化」が新国家の基盤となり、旧東独国民が「学習能力」(Lernfähigkeit)を発揮したことに喝采するのである(88・89)。

非西洋世界への移転型ナショナリズムとして、ヴェーラーがまず注目するのは18世紀末のラテンアメリカである。しかしラテンアメリカの場合には、伝統的に堅固なエトニー的基盤が欠如していた(「多文化的多元性」(multikulturelle Heterogenität)が存在していた)ために、非常に不安定になったのだという。これに対し「西欧の成功例の徹底的な模倣」が順調に行われた日本の場合、エトニー的基盤が「ほとんど最適な前提」としてあり、「イギリスに比肩」される状況にあったという。ヴェーラーは、日本において「エトニー的支配・連帯の結びつき」が「まさに理念型通りに形成されていた」ことに驚嘆し、これが「伝統豊かなネイション」として再解釈されるのは「全く造作ないこと」だったと見ている。同時にヴェーラーは、「太陽の女神の息子たち」に統治される唯一の国としての選民思想や、アイヌや周辺民族への「人種的思い上がり」にも触れている。文明開化で日本人学生が訪れたのは「とりわけプロイセンの」大学だったとされ、日本人のプロイセンへの親近感が強調されている。日本をモデルとして「国民民主主義的・共和制的運動」を起こしたのが中国の孫文で、満洲王朝を倒して漢民族のエトニー的伝統がナショナル・アイデンティティを特徴付けた。

日本や中国でナショナリズムが勃興するなかで、インドやインドネシアでも同様の運動が生まれていったが、植民地支配からの脱却が実現したのはようやく第二次世界戦争後のことであった。こうした植民地の移転型ナショナリズムには構造的共通点があり、それは、(1)エリートが西洋の学校で訓練を受け、帰国して教育によるネイション形成運動を起こしていること、(2)不安定なエトニー的基盤を克服して国民国家を形成するのに多大な労力を払っていること、(3)リーダーたちが自国で、西洋の学校時代にマルクス主義の洗礼を受け、西欧の資本主義に批判的になり、国家主導の経済発展に魅力を感じるようになるということである。こうした旧植民地諸国の困難を示しつつ、ヴェーラーは国民国家モデルを世界一般のモデルとすることの無理を指摘している(90-98)。

ヴェーラーは、ナショナリズムが「できるだけ早く完全に信頼を失う」のが望ましいとして、ヨーロッパ的国民国家ドイツを謳い上げるヴィンクラーとの明確な違いを見せている。確かにヴェーラーは、国民国家が西洋においては多くの成果を取ってきたともいう。そこで成果とされるのは、産業革命であり、法治国家であり、社会国家であり、社会的紛争の制度化である。しかしこうした成果は、本質的に国民国家だけが達成しうるものというわけではないし、均質な国民国家を目指すことで排除される人間集団が生まれ、多民族による連邦制運営なども困難になるので、結局国民国家は「ヤヌス」なのだという。ヴェーラーは模範となる例として、アメリカ合衆国やドイツ連邦共和国の連邦制、ヨーロッパ連合の国家連合を挙げ、ナショナリズムに基づく中央集権制の解体を訴えている。ヴェーラーは、(彼の敵視する)「歴史主義」がナショナリズムを当然の前提としてきたと批判し、ナショナリズムは独占的アイデンティティではなく、「多重的アイデンティティ」(multiple Identität)の一つとなるべきだと訴え、また西欧諸国では民主主義や法治国家などの基盤が磐石であるために、ナショナリズム回帰は不要であると断言している。ヴェーラーは新しい(つまり「歴史主義」以降の)ナショナリズム研究に、こうしたナショナリズム抑制の政治的効果を期待しているのである(99-115)。

3. 評価

以上ヴェーラーのナショナリズム研究を概観してきたが、ここで特徴的

な点を列記してみよう。

(1)ヴェーラーの提示するナショナリズム研究は、他者の研究、とりわけ輸入されたアングロ＝サクソン系ナショナリズム研究のパッチワークである。もっともそれは無批判な受容ではないので、独創性がないわけではない。ヴェーラーは、とりわけアンダーソンやホブズボームのネイション「脱構築」論を明示的に信奉しているが、実はそれとは対極的なアンソニー・スミスのエトニー論も大規模に援用している。ただいづれにしても、こうしたヴェーラーの顕著な理論志向が、彼が批判する「歴史主義」の世代と対極的なのは言うまでもない。

理論志向の研究にはありがちなことだが、ヴェーラーのナショナリズム叙述には紋切型が目につく。例えばヴェーラーは、前近代ドイツの分裂状態を強調しながら、日本のエトニック均質性を断固として強調し、日本の留学生がプロイセンを主たる滞在地にしていたと典拠なしに言いきっている。確かにベルリン大学の存在感はあるとしても、小野塚喜平次、吉野作造、上杉慎吉、佐々木惣一らの主たる留学地はハイデルベルク（バーデン大公国）で、穂積八束もベルリンと並んでハイデルベルク、ライプツィヒ（ザクセン王国）、シュトラスブルク（帝国領エルザス＝ロートリンゲン）などで学んでおり、プロイセン王国が圧倒的とは言えまい。それにそもそも日本人の留学先は、ドイツばかりではなかったはずである。また日本人留学生には理系のものも多く、プロイセンへの日本人留学生が日本の政治発展に関してみな同じ態度を示したとは考えにくい。ヴェーラーには、非西洋世界をエキゾチックに描こうとする傾向があるのではないだろうか（もっともこれはヴィンクラーの場合も同じだったが）。

(2)ヴェーラーはナショナリズム研究に関しても、「歴史家ツンフト」及びその業績を批判しやすく歪曲している。今日研究史を冷静に振り返れば、この世代の研究者が一律にネイションを実体視し、太古の昔から連綿と受け継がれたものがあるとき覚醒したなどを見ていたわけではないことが読み取れるはずである。とりわけ「眠りの森の美女」のような幼稚な比喻を、一体旧来のどのナショナリズム研究者が用いたというのだろうか（勿論ヴェーラーはその典拠を示していない）。

ヴェーラーが先行研究批判でまず念頭に置いていたのは、マイネッケ『世界市民主義と国民国家』ではなかったかと思われる。マイネッケはこの著作で、確かにネイションを実体として捉えており、しかもそこには「血液

の近似によって生じた自然的中核が、絶対に存しななければならない」とし、ネイションが「植物的」(vegetativ) 状態から覚醒していくとも述べている。このような表現は、確かに同時代のヴェーバーの人種・ネイション論と比較しても、かなり素朴な印象を与えるものである。ただそのマイネッケにしても、ネイションが絶えざる変化の中にあることは繰り返し指摘し、「擬似自然的統一団」が「太古の昔」からそのまま受け継がれたとは考えていない¹⁷⁾。

マイネッケの孫弟子コンツェの『ドイツ国民の歴史』になると、記述はより精密になる。ここでも「ドイツ国民」はある程度実在するものとして観念され、中世盛期にその発生が求められている。しかしコンツェは、それが「歴史の産物」であることを強調し、永遠のものでも太古の昔からのものでもないと明言している。またコンツェは、それは単純に取替え可能なものではないとしつつも、結局はルナンが「日々の国民投票」と言ったように個人の主観によるものだと言っている¹⁸⁾。

ちなみにマイケッケの門下生で、コンツェの師でもあるロートフェルスの『ビスマルクと東方』は、プロイセン東部における「多重的アイデンティティ」を扱った作品である。ロートフェルスの問題関心は、ビスマルクがポーランド人政策において追求したのは、ドイツ・ナショナリズムではなくプロイセン愛国主義であったというものである。換言すれば、ビスマルクはポーランド人にドイツ人になるよう強制したのではなく、プロイセン臣民としての恭順を求めたということである。ロートフェルスは、ここでナショナリズムとは別次元のアイデンティティである王朝国家への忠誠心という現象を指摘しているのである¹⁹⁾。

以上見るように、ナショナリズム研究は「歴史家ツンフト」時代からの長年に亘る議論の積み重ねにより進展してきたのであり、ヴェーラー世代が1983年に一気に革新したわけではないのである。

ちなみに中世史家・初期近代史家の「国民意識」研究を門前払いするヴェーラーが、その金字塔的叢書『ナツィオーネス』に1回も言及しないどころか、参考文献一覧ですら挙げていないのは、実に驚くべきことである。国制史家ヴァルター・シュレジンガー(1908-1984年)や理念史家ヘルムート・ポイマン(1912-1995年)らが展開する「国民意識」論は、ドイツとしてのまとまり意識がどのように育まれてきたかを探求する政治思想史研究であり、ヴェーラーの注目するような大衆的・絶対的ナショナ

ル・アイデンティティが、何の変化もなく中世から連綿と存在したというような荒唐無稽な議論ではない²⁰⁾。ヴェーラーが中世史・初期近代史研究にどの程度向き合ったのか、問われることになるだろう。

(3)ヴェーラーは、自分が(「ナショナリズム」を批判して「国民意識」などを救済しようとした)年長世代の研究者とは違い、「ナショナリズム」概念を「可能な限り中立的」なものとして設定するというが、これは彼がナショナリズムへの否定的価値判断を繰り返していることで矛盾をきたしている。確かにヴェーラーの議論は、健全な「国民意識」と不健全な「ナショナリズム」という善悪二項対立にはなっていないが、「ナショナリズム」の克服を望むと末尾で明言しておいて、それでなお「中立」性を自称するのは大いに無理がある。この文脈で更に不可解なのは、ヴェーラーが多用している *nationalistisch* という形容詞である。ヴェーラーはこの概念を、明らかに他者の物言いの紹介ではなく、自分自身の分析概念として用いており、しかも否定的な意味合いを込めているが、これも「ナショナリズム」概念の「中立」性を唱道する彼の方針と整合しないのである。

(4)ヴェーラーのナショナリズム研究では、アメリカ・ナショナリズムの傲岸不遜への辛辣な態度が目につく。前述のようにヴェーラーはアメリカ帝国主義研究で教授資格を取得しようと試みた人物であるから、この問題領域についての造詣も深いわけだが、この著作が2001年以降に刊行、再版されたものであることを考慮すると、9.11同時多発テロによって刺戟された部分もあるのではないかと推測される²¹⁾。ただここで問題が2つ生じる。第1に、人類普遍の理念である人権や民主主義の普及を自らの使命とし、その敵対者を悪魔のように描くアメリカ・ナショナリズムの傾向を、ヴェーラーが問題視するのであれば、ヴェーラー自身がかつてドイツ帝国や「歴史家ツンフト」を糾弾し、また現在ではイスラム勢力を徹底的に非難しているのはどうなのか、ともに「知性主義の逆説」²²⁾ではないのかという点である。第2に、ヴェーラーはアメリカに戯画的に描かれた敵対者の例として、ホー・チ・ミンやサダム・フセインと並んでヴィルヘルム2世やアドルフ・ヒトラーを挙げているが、これはヴェーラーがアメリカによるヴィルヘルム2世やアドルフ・ヒトラーへの不当な批判を問題視しているということなのかという点である。歴史家として繊細な描写を要求するのは至極当然のことだが、「ドイツ特有の道」論者ヴェーラーの発言としては意外な感じがしないでもない。

(5)ヴェーラーはゲルナーらに依拠し、ナショナリズムが「近代の産物」であることを強調するものの、同時にスミスのエトニー論を(典拠を明言せず)事実上)導入しているため、論旨に矛盾が生じている。というのもスミスのエトニー論とは、ゲルナーらの「近代主義」への批判から生まれた「原初主義」の一種であり、それを大幅に援用するということは、「近代」以前にナショナリズムの萌芽あるいは助走部分がかかなりあったということをも認めることになるからである。なるほどヴェーラーの設定する「ナショナリズム」概念は大変狭いので、彼にとっては近代以前のエトニーは「ナショナリズム」の枠外の現象なのだろう。けれどもヴェーラーは、彼が非難する中世史学者や初期近代史学者と、歴史的事実の認識において果たしてどれほど違うのだろうか。歴史的事実の認識においてはそれほど変わらないが、単に「ナショナリズム」の定義が異なるために、それが「近代の産物」かどうかで意見が分かれているというだけのことではないのだろうか。だとすればそれは本質的な見解の相違とは言えまい。ヴェーラーは、一見「ナショナリズム」が「近代の産物」であることを論証しているようだが、実は初めから「近代の産物」になるように「ナショナリズム」を狭く定義しており、堂々巡りの循環論に陥っているのである。

(6)ヴェーラーはエトニーとネイションとを区別するために、ナショナリズムがネイションを「半神」として絶対視、神聖視し、競合する他の忠誠対象を許容しないと説明しているが、これはかなりハードルの高い基準である。そこまで極端な基準で合格するナショナリストは、「近代」の真最中でも果たして何人実在したのだろうか。ヴェーラー自身が正当にも指摘しているように、人間のアイデンティティとは常に多層的なものであるから、ネイションを「半神」のように絶対視、神聖視するということは、ごく特殊な状況を除いては、通常の間人生活では有り得ないように思われるからである。ヴェーラーが批判するマイネッケにしても、彼が崇拜するヴェーバーにしても、祖国ドイツへの愛情においては人後に落ちなかったとはいえ、それを「半神」のように絶対視、神聖視したというわけではなかったように思われる。

(7)ヴェーラーの非西洋理解を読んでいると、日本やイギリスのように近代以前から均質なエトニーが存在したところでは安定した国民国家の形成が容易で、それが欠如していたラテンアメリカや南アジアのようなところでは国民国家が安定しないと、宿命論的に論じているような印象を受ける。

だとすれば結局それは、一国の政治の安定化にはエトニ－的同質性（まさしく彼の学友ユルゲン・ハーバーマスやその信奉者たちが唾棄する「政治以前の」(vorpolitisch) 基礎²³⁾）が、やはり現実問題として必要だという議論を、少なくとも非西洋世界に関しては認めることになるのではないだろうか。本論でもすでに触れたように、近年のヴェーラーはトルコのEU加盟やドイツのトルコ系移民を批判し、『ドイツ社会史』最終巻（第5巻・2008年）では「戦鬪的イスラム主義」を「政治的ペスト」(eine politische Pest) とまで呼んでいるが²⁴⁾、そうしたことを念頭に入れると、この診断はほぼ確実に思えてくる。

(8)ヴェーラーは、ナショナリズム研究でも「聖マックス」への傾倒が目立つが、彼のヴェーバー受容は個性的である。例えばヴェーラーは、「構築主義」的ナショナリズム研究の理論的先駆者にヴェーバーを見ている。確かにヴェーバーは、社会学者大会や『経済と社会』において、ネイションや人種というものが人間の認識に依存しており、決して元から「実体」として存在していたものではないことを指摘している²⁵⁾。けれどもアンダーソンやヴェーラーらとは異なり、ヴェーバーが反ナショナリズムの政治的意図をもってそうした議論を展開していたわけではないことは確認されるべきである。政治評論家としては、あるいはまた農業経済研究者としても、ヴェーバーはネイション（あるいは「ドイツ人」、「ポーランド人」など）を明らかに実体として扱っている。ネイションが認識の産物であるということは、ヴェーバーのネイションへの忠誠心にブレーキをかけるものでは毛頭なかったのである。またヴェーラーは、ナショナリスト・ヴェーバーについてもその冷徹な思考に感服しているが、それはこの人物の冷徹とは言い難い言動を知らないか、無視しているということの意味する。前述のようにヴェーラーがモムゼンのヴェーバー研究を激賞しながら、モムゼンの中核的主張を汲み取っていないのは不思議である。

(9)ヴェーラーの西欧主義的な比較政治発展論、つまり「ドイツ社会史」の研究企画は、実は「構築主義」が「脱構築」しようとしている国民国家の枠組を暗黙の前提とするところから出発しているように思われる。ドイツという枠組が自明のものでないとなれば、そもそも「ドイツ社会史」なるものの執筆自体が不要になるはずである。ここには、彼の依拠する「構築主義」一般の矛盾が表れている。そもそも政治に関するものは全て人間の観念の産物であり、それは「ネイション」、「家族」、「ジェンダー」だけ

でなく、「理性」、「人権」、「個人」も同じことである。もしそれらが、人間の観念の産物であるというだけの理由で、実体がないと批判されるのならば、政治に関する学問も実務も一切成り立たなくなるのである。かといって自分の都合のいい時に、都合の悪いものだけ「脱構築」しようというのは、学問として恣意的である。「ネイション」が人間の観念の産物であり、天下りの存在するものでないことを指摘するのはよいが、そもそも人間生活は無数の観念の産物から成り立っているという冷めた視覚が必要である。

以上、9点に亙りヴェーラーのナショナリズム論を批判的に検討してきた。蓋し歴史家ヴェーラーの特長は、膨大な情報を処理して次々と論題を提示する圧倒的な生産力と、強烈な現実政治的（大学内政治も含む）関心に牽引された鋭利な問題提起とにある。これは、ヴェーラーが尊敬して已まないヴェーバーにも見られたものであった。但しこの2つの特長は、歴史家にとって両刃の剣である。生産力の高さには、図式的に割り切った議論の繰り返しに陥る危険があり、強烈な現実政治的関心には、一面的で感情的な批判に陥る虞がある。ただヴェーラーほど（あるいはヴェーバーほど）生産力が著しく、批判が尖鋭な研究者の場合は、その分析内容に賛否両論が有り得るとしても、我々はそこから多くの刺戟を得ることができるのではないだろうか。その意味でヴェーラーのナショナリズム研究は、今後も我々に議論の契機を十分に提供してくれることであろう。

注

- 1) Hans-Ulrich Wehler, *Krisenherde des Kaiserreichs 1871-1918. Studien zur deutschen Sozial- und Verfassungsgeschichte*, Göttingen 1970.
- 2) Hans-Ulrich Wehler, *Das Deutsche Kaiserreich 1871-1918*, Göttingen 1973.
- 3) Hans-Ulrich Wehler, *Deutsche Gesellschaftsgeschichte*, 5 Bde., München 1987-2008.
- 4) Hans-Ulrich Wehler, *Nationalismus. Geschichte — Formen — Folgen*, 3. Aufl., München 2007.
- 5) 引用註こそないものの、これはナショナリズムの「哲学的な貧困」(philosophical poverty)を論じたアンダーソンの模倣だろうと思われる。ただヴェーラーがマキアヴェッリ、ヘーゲルを挙げている部分では、アンダーソンはトクヴィルを挙げている（ホブズ、マルクス、ヴェーバーを挙げている点では両者は同じである）(Benedict Anderson, *Imagines Communities. Reflections*

on the Origin and Spread of Nationalism, revised edition, London/New York: Verso 1991 (reprinted 1995), p. 5.)。

- 6) この問題提起は、明らかにヴェーバーの『宗教社会学論集』「序文」を意識したものであろう (Max Weber, Vorbemerkung, in: Ders., Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie I, 1.-9. Aufl., Tübingen 1988, S. 1-16.)。
- 7) Theodor Schieder, Typologie und Erscheinungsformen des Nationalstaats in Europa, in: Ders., Nationalismus und Nationalstaat. Studien zum nationalen Problem im modernen Europa, 2. Aufl., Göttingen 1992, S. 65-86.
- 8) Hans-Ulrich Wehler, Deutsche Gesellschaftsgeschichte, Bd. 1: Vom Feudalismus des Alten Reiches bis zur Defensiven Modernisierung der Reformära, 3. Aufl., München 1996, S. 35.
- 9) ヴェーラーは『ドイツ社会史』第1巻(1770-1815年)で、1800年の時点では「ドイツ」が「国家」としても「地理的統一体」としても確立しておらず、まして「政治的ネイション」としては論外であったが、ドイツとは何かについて知識人の間で論争があったことを紹介している。また「近代化の危機」、「革命」、「外国支配」への反動として「近代ドイツ・ナショナリズム」が擡頭したことを力説している (Hans-Ulrich Wehler, Deutsche Gesellschaftsgeschichte, Bd. 1: Vom Feudalismus des Alten Reiches bis zur Defensiven Modernisierung der Reformära, 3. Aufl., München 1996, S. 44-48, 506-530.)。
- 10) ヴェーラーはこの時期を「ドイツ・ナショナリズムの第2の発展段階」と称している (Hans-Ulrich Wehler, Deutsche Gesellschaftsgeschichte, Bd. 2: Von der Reformära bis zur industriellen und politischen „Deutschen Doppelrevolution“ 1815-1845/49, 3. Aufl., München 1996, S. 394-412.)。
- 11) この内容は、『ドイツ社会史』第3巻に詳述されている (Hans-Ulrich Wehler, Deutsche Gesellschaftsgeschichte, Bd. 3: Von der „Deutschen Doppelrevolution“ bis zum Beginn des Ersten Weltkrieges 1849-1914, 3. Aufl., München 1996, S. 946-952.)。
- 12) この内容は、『ドイツ社会史』第4巻に詳述されている (Hans-Ulrich Wehler, Deutsche Gesellschaftsgeschichte, Bd. 4: Vom Beginn des Ersten Weltkrieges bis zur Gründung der beiden deutschen Staaten 1914-1949, München 2003, S. 14-38.)。
- 13) この内容は、『ドイツ社会史』第4巻に詳述されている (Wehler, Deutsche Gesellschaftsgeschichte 4, S. 483-511.)。そこでとりわけ目を惹くのは、「保守革命」概念への「根本的批判」である。ヴェーラーはこの後年生み出された概念が、多用な潮流を包摂する余り、分析概念としての明確さを欠いていると考えている (Ebenda, S. 486-493.)。
- 14) この点に関するゴールドハーゲン批判は、『ドイツ社会史』第4巻に詳述されている (Wehler, Deutsche Gesellschaftsgeschichte 4, S. 654, 883.)。

- 15) ヴェーラーは『ドイツ社会史』第5巻で、西ドイツの経済復興、西欧統合の枠内での主権回復、デモクラシー、連邦主義、社会国家など栄光の軌跡を誦い上げる一方、東ドイツを(ソヴィエト連邦の)「属州」、「全体主義」と酷評し、「奴隷的」、「病理的」と形容して已まない。なおヴェーラーが好む「属州」(Satrapie)という概念は、古代中近東の独裁体制を連想させる歴史的用語であるから、顕著な西洋中心主義者ヴェーラーにとっては、強い否定の意味を含めた言葉なのだろうと思われる(Hans-Ulrich Wehler, *Deutsche Gesellschaftsgeschichte*, Bd. 5: Bundesrepublik und DDR 1949–1990, München 2008, S. 235–361.)。
- 16) ヴェーラーは西ドイツの「ポストナショナル」な「政治文化」を強調し、ヨーロッパがドイツに替わる忠誠の対象になっていたと力説している(Hans-Ulrich Wehler, *Deutsche Gesellschaftsgeschichte*, Bd. 5: Bundesrepublik und DDR 1949–1990, München 2008, S. 238.)。
- 17) Friedrich Meinecke, *Weltbürgertum und Nationalstaat*, München 1962, S. 9–26 (フリードリヒ・マイネッケ(矢田俊隆訳)『世界市民主義と国民国家I——ドイツ国民国家発生の研究』(第2刷)(岩波書店、昭和48年)、3–24頁。)
- 18) Werner Conze, *Die deutsche Nation. Ergebnis der Geschichte*, Göttingen 1963, S. 9f. (ヴェルナー・コンツェ(木谷勤訳)『ドイツ国民の歴史』(創文社、昭和52年)、3–4頁。)
- 19) Hans Rothfels, *Bismarck und der Osten. Eine Studie zum Problem des deutschen Nationalstaats*, Leipzig 1934.
- 20) *Nationes. Historische und philologische Untersuchungen zur Entstehung der europäischen Nationen im Mittelalter*, 9 Bde., Sigmaringen 1975–1991.
- 21) 受理されなかった教授資格論文を基にしたと思われるヴェーラーの著作『アメリカ帝国主義の檻頭』には、本書で見られるアメリカ・ナショナリズム論の骨子がすでに現れている(Hans-Ulrich Wehler, *Der Aufstieg des amerikanischen Imperialismus. Studien zur Entwicklung des Imperium Americanum 1865–1900*, Göttingen 1974, bes. S. 10–14.)。
- 22) 今野元『マックス・ヴェーバー——ある西欧派ドイツ・ナショナリストの生涯』(東京大学出版会、平成19年)、359–372頁。
- 23) Jürgen Habermas/Joseph Ratzinger, *Dialektik der Säkularisierung. Über Vernunft und Religion*, Freiburg/Basel/Wien 2005, S. 15–37 (ユルゲン・ハーバーマス/ヨーゼフ・ラッツィンガー(三島憲一訳)『ポスト世俗化時代の哲学と宗教』(岩波書店、平成19年)、1–25頁。)
- 24) Hans-Ulrich Wehler, *Deutsche Gesellschaftsgeschichte*, Bd. 5: Bundesrepublik und DDR 1949–1990, München 2008, S. XIV.
- 25) 今野元『マックス・ヴェーバー』、182–191頁。

Hans-Ulrich Wehler und seine „kritische“ Analyse zum Nationalismus (2) Forschungsprojekt „Nationalismusforschung in Deutschland“

Hajime KONNO

In seiner Nationalismusforschung schließt sich Hans-Ulrich Wehler dem angelsächsischen „Konstruktivismus“ an und stellt den „Essentialismus“ der deutschen „Historikerzunft“ in Frage. Wehler zufolge sei eine Nation nur eine „gedachte Ordnung“ und eine Konstruktion des Nationalismus, der wesentlich als eine Antwort auf die „Modernisierungskrise“ zu erklären sei. Als Pionier in der Nationalismusforschung, der den Mythos der Nation entlarvte, verehrte Wehler Max Weber (1864–1920) in erheblichem Maße, wenngleich die Aggressivität des Nationalismus Webers ihn kaum interessiert. Obgleich Wehler vormoderne Anfänge der Nation und des Nationalismus leidenschaftlich verneint, erkennt er doch die Existenz der „Ethnie“ vor der Moderne.

Ferner betonte Wehler nachdrücklich, daß Nationalismus das „Unikat“ des Abendlandes sei und erst später zur außerwestlichen Welt exportiert worden sei (Transfernationalismus). Für das erfolgreichste Modell erachtete Wehler vor allem Japan, während er in lateinamerikanischen, asiatischen und afrikanischen Staaten mehr Schwierigkeiten sieht. Wehler sieht in der traditionsreichen, festen „Ethnie“ eine unübersehbare Voraussetzung für einen erfolgreichen Transfer der Nationsidee.

Anders als Heinrich August Winkler, der nach der deutschen Wiedervereinigung in der Öffentlichkeit den neuen deutschen Nationalstaat als westliche Normalität begrüßte, behält Wehler seine Skepsis gegenüber dem Nationalismus bei. Obwohl Wehler erklärt, daß er seinen Nationalismusbegriff als ein rein wertfreies analytisches Mittel zu verwenden beabsichtigt, macht er keinen Hehl aus seiner Abneigung gegen den Nationalismus. Als Alternative zum zentralistischen Nationalismus vertritt Wehler die föderalistische Demokratie, die in den USA und in der Bundesrepublik Deutschland hervorra- gendste Beispiele findet.